サウス・チャイナ・モーニング・ポスト 2024年1月14日掲載

「香港ニュー・ウェイヴの旗手　イム・ホー（厳浩）の『ホームカミング』から『レッドダスト』まで作品で表現された中国の内情」

イム・ホーについては、香港映画界でニューウェーヴの中心的人物とされるアン・ホイ（許鞍花）に比べると取り上げられることが極端に少ないのが実情です。イム・ホーもニュー・ウェイヴの旗手として活躍したことからすれば寂しい限りですが。1980から1990年代にかけてイム・ホーは実に興味深い作品を何本か発表しています。

香港の映画監督のこれまでの系譜を辿ると、イム・ホーと言えば中国本土で制作した一連の作品の陽が当てられているようです。1984年の「ホームカミング」は、香港の映画監督が本土で撮った初の作品の一本ということになります。

イギリスで映画制作を学び、香港のテレビ局で経験を積み、1978年にコメディ作品「ジ・エキストラ」を監督し映画界にデヴュウしましたが、このときには「ホームカミング」で見られる彼独自のスタイルはまだ確立されていませんでした。

中国で制作されたイム・ホーの作品は、それぞれ異なる性格のものであり、社会派ドラマあり、艶やかな歴史ロマンスあり、実話に基づく殺人ミステリーあり、少数民族を題材にした作品ありと多岐に渡っています。

デヴュウ作にコメディを選んだイム・ホーですが、1995年のポスト紙のインタヴューに対しては真摯な映画に対する姿勢を見せ、「私にとって映画制作は自分自身について、もっと学ぶ機会を与えてくれるプロセスであり、映画を撮っているときには自身の精神状態が反映されるものだと考えています」と語っています。

「HOMECOMING」（1984 「似水流年」）

イム・ホーの中国での第一作目の作品で、香港のビジネスウーマンであるコラール（ジョセフィーヌ・ワー　顧美華）が祖母の葬儀のために中国の故郷の街に戻るという設定で、彼女は滞在中に中国を代表する大女優スーチン・ガワオー（斯琴高娃）演じる旧友のパールに対し自身の優位性を見せつけようとするストーリーです。

イム・ホーは、この作品で二人の女性の日常の生活ぶりと考え方を対照的に捉えます。二人共不幸な境遇にあるものの、自分の生活の方が数段優っていると思っています。コラールが大都市での生活は実にエキサイティングだと言えば、パールは穏やかな田舎の生活こそ何よりだと対抗意識をあからさまに見せるのでした。

詩人で評論家のテリー・ボイスは、「フローラの人物設定には倫理性もしくは政治的に表立った要素が織り込まれていないというのが、大きなプラスポイントとなっている。二人が再会したことで思わず自分の生活のことを改めて考え直すことを強いられる。そして、二人は同じように考え直すことになるが、二人の違いは自分の生活ぶりの隠し方の違いだけだった」と述べています。

「ホームカミング」の作品としてのスタイルは、1980年代に活動を始めた中国第五世代の映画監督たちに共通するものがあります。後に、イム・ホーはインタヴューに応じて、「中国で映画を撮ることは中国当局の課す制限に対し耐えなければならないことを意味する」と語っていた。

BUDDHA’S LOCK」（1987「天菩薩」）

ここでのイム・ホーは「カミングホーム」とはまったく異なる題材を取り上げています。舞台は第二次世界大戦中の四川省と雲南省の境界にある大涼山で、ここに住む少数民族を対象とした魅力的な民俗学的要素を含むドラマが展開されます。

このストーリーは、イム・ホーが中国を旅しているときに耳にした、一人のアメリカン人兵士のもので、彼は誘拐され奴隷として売られる身の上です。アメリカ兵ジェイムズ・ウッド（ジョン・X・ハート）は銀と阿片の密輸に関わろうとしたものの、騙された挙げ句に原始的なイ族に奴隷として売られてしまいます。イ族は中国では外国人扱いを受ける民族で、動物的とも言える風習、習慣を持ち祖先は羊だと信じているとも噂されています。

ウッドはこの少数民族のもとで十年を過ごし、その間に彼らの言語を学び妻も娶りましたが、人民解放軍がこの地に来て奴隷制度は廃止されたことを知るまで奴隷として過ごしたことになります。1987年のポスト紙の映画評では、「昨年度の香港映画の中で『大菩薩』は唯一シリアスな作品だった」と評され、イム・ホー自身は。「いかに我々が運命に翻弄されているかを描いてみたかった」と語っています。

「RED DUST」（1990「滾滾紅塵」「レッドダスト」）

「レッドダスト」もまた異なった題材を扱った作品で、ここでは1940年代のある中国の都市で星を散りばめたようなロマンス巨編である、作家アイリーン・チャンのエピソードから大まかなストーリーが構成されています。

舞台は中国東方部のハルピン、日中戦争の最中に日本人の協力者と恋に落ちた富裕な女流小説家の物語であり、この禁じられた恋と彼女の周辺を丹念に描いた作品に仕上がっています。主演女優ブリジット・リン（林青霞）は、1980年代は恋愛映画のヒロインとして、1990年代には功夫映画にも数多く出演したキャリアを持ち、恋人役には実生活のパートナー、チン・ハンが演じ、敵役にはマギー・チャン（張蔓玉）が扮している。

ロマンスとしての出来はいいものの、イム・ホーの持っている洞察力がいつになく欠けているようにも見える作品です。ポスト紙は、「ブリジット・リンの演じる小説家は知的で能弁な性格だが、シナリオライターは彼女が敵対する日本人を愛することで覚える葛藤を取り上げず、むしろ避けて、日本人の恋人が『愛しています』という言葉を口にしないことに考えを巡らし、余計な時間をかけてしまった」と否定的な評価を下しています。イム・ホーは1990年のポスト紙のインタヴューで、「政治的なことには私はノータッチだし、ストーリー作りは作家なりシナリオライターの考え次第です。しかし、このストーリーは1990年の現在の香港の状況に酷似していると思います。政治的にも社会的にも不安定なところが」と語っています。

「THE KING OF CHESS」（1991「棋王」）

「レッドダスト」の後、イム・ホーはツイ・ハーク（徐克）プロデュースでこの作品の監督を務めています。この作品は、文化大革命中の中国と近代化の進む台湾との類似点を、両者の抱える社会問題を比較するという意欲作と言えます。ツイ・ハーク自身がこのテーマを敬遠し、プロデューサーにとどまり監督をイム・ホーに任せたという経緯があります。作品の評価としては、イム・ホーのベストの部類に入るものですが、賛否両論の評価に分かれたのも事実です。ポスト紙のポール・フォノロフは「中国と台湾の間にある劇的とも言える関係性を観客は果たして理解でき得るのか、類似点があるにしろそれはあまり触れたくないことではないのか」と評している。

「THE DAY THE SON TURNED COLD」（1994「天国逆子」「息子の告発」）

再び方向性を変えて、イム・ホーが制作したこの作品は、彼が中国で目にした新聞記事にあった殺人事件が基になっています。物語は、父親を殺した息子が警察で語った内容のもので、母親が語り手となってストーリーが展開されます。母親役のスーチン・ガワオー（斯琴高娃）の名演が光ります。

イム・ホーは「セリフの大半は公式な記録から直接流用したものです。この作品の狙いは真実と虚構との間に線引を行うことでした」と語っている。彼がこの作品で試みたのは、家庭内の儒教的な教えの実践と法律との間の衝突をいかに解釈するかというところにありました。イム・ホーは「この息子は社会のきまりに従って行動すべきだったのか、それともそれを無視し反逆者として行動すべきだったのか、その生き方の難しさを描いたものです」とも語っている。

「THE SUN HAS EARS」（1995　「太陽有耳」「太陽に暴かれて」）

この作品は、1920年代の中国の地方軍閥が統治する農村を舞台にした歴史ドラマで、ハンサムな軍閥の将軍と陰謀を企む農民の夫との間で心の動揺を覚える女性（張玉）を描いたものです。

ヴァラエティ誌で、デレク・エリイは「この作品には独自の語り口があり、新鮮さを感じる」と記しています。イム・ホーはこの作品を監督するに当たり新機軸を打ち出し、「私の初期の作品にはこれほど魅力的な登場人物はいませんでした。アメリカ映画を研究した結果、観客はこういうヒロインの出現を待ち望んでいると気付いたのです。それを実現したのがこの作品です」と語っている。